

自然とともに生きる人びと—台湾先住民族と徳島の生活文化—

(会期：2025.1.18～3.2)

= ミニガイド =

はじめに

徳島出身の人類学・考古学の研究者である鳥居龍蔵(1870-1953)は、1896(明治29)年から1911年にかけて、5回にわたり台湾へ赴き、先住民族からの聞き取りを行うとともに、これにもとづくメモ、スケッチなどの記録を作成しました。鳥居の調査対象であった台湾の先住民族は、自然環境に対する経験的な知識を持ち、自然と共生する生活文化を育んできた人びとでもありました。今も、そうした文化の継承と創造が続けられています。

この展示では、鳥居による台湾調査について概観するとともに、国立台湾史前文化博物館が制作したパネルをもとに、先住民族が受け継いできた自然と共生する文化を紹介します。あわせて、徳島の人びとの自然環境との共生にも目を向けます。

なお、この展示は、徳島県立博物館で開催中のアイヌ工芸品展「アットゥシと太布」(3月9日まで)に連携して開催するものです。二つの展示をつなぐことで、広く文化の関連性に触れていただければ幸いです。

1 鳥居龍蔵の見た台湾

鳥居龍蔵は、5回にわたる台湾調査において、すべての先住民族を調査し、9民族に分類しました。鳥居はカメラを用いて画像記録を遺したほか、身体的な特徴の調査や見聞の記録なども多数遺しています。それらは先住民族に関する貴重な歴史的資料として、台湾でも関心を集めています。

Topic 鳥居龍蔵記念博物館と国立台湾史前文化博物館の連携

鳥居龍蔵記念博物館では、開館10周年及び鳥居龍蔵生誕150周年という大きな節目であった2020年度、国立台湾史前文化博物館との交流の機運が芽生えました。

コロナ禍という障壁がありましたが、その後、オンライン会議や電子メールでの協議を経て、2022年9月、相互連携協定を締結しました。

2023年からは、相互訪問による現地調査(鳥居龍蔵の調査地の確認や聞き取りなど)や、鳥居の調査ノートの見直しと研究に共同で取り組んでいます。

近い将来、台湾（史前文化博物館）と日本（鳥居龍蔵記念博物館など）において展覧会を開催し、共同での調査研究の成果を発表する予定です。

2 文化と環境の共生—台湾先住民族の文化と環境知識—

台湾先住民族が用いてきた環境に関する伝統的な知識を紹介します。これらの知識は、環境と文化が相互に作用し合うことで形成されました。環境は文化を育み、同時に文化も環境の影響を受けます。環境と文化は、相互に関わり合い、対応しあっているのです。

以下では、主としてパネルによって、アワやカジノキ、カラムシ、トウなどの植物が、資源として先住民族の生活と結びついていることを紹介するとともに、蘭嶼のタオ（ヤミ）族の海洋に関する知識にも触れます。

文化と環境の共生は、国や民族を越えて普遍的にあったものですが、現在では失われたものが少なくありません。台湾先住民族の事例を踏まえて、改めてその意義を見直してみたいものです。

3 環境と共生してきた徳島の人びと

自然環境と共生する文化について、徳島の事例を紹介します。台湾先住民族に類似する徳島の文化に、植物繊維の利用があります。現在は那賀町木頭地区で製造技術が伝承されている太布がそうです。1901年、木頭地区を訪ねた鳥居龍蔵は、調査ノートに「那賀のあら妙」というタイトルを付けました。「あら妙」、すなわち太布はこの地域を象徴するものであったのでしょうか。

太布とは、コウゾ、カジノキなどの樹皮を材料として糸を紡ぎ、織って作った布のことです。古くから日常的に使用されましたが、江戸時代以降の木綿の普及に伴い、あまり使われなくなりました。

徳島では古代において、吉野川流域で阿波忌部氏がカジヤアサを栽培し、布を作ったという伝承があります。太布の歴史と関連して興味深いものです。

鳥居龍蔵記念博物館 デジタルアーカイブ

<https://x.gd/d0Ko2>



鳥居龍蔵記念博物館 ダウンロードコーナー

<https://x.gd/Lw1Bl>

